

札幌市における人口分布の変化

The Population Distribution Pattern in Sapporo City

沼田 尚也*
Naoya NUMATA*

キーワード：人口密度、人口増加率、都心再集中、札幌市

Key words : population density, population growth rate, re-centralization, Sapporo city

第二次世界大戦後、札幌市では急速に人口が増加し、特に高度経済成長期以降、北海道内外から著しい人口流入がみられた。そこで本研究は、この人口増加に伴い札幌市内部でどのような人口の分布変化が生じたのかを、人口密度と人口増加率より明らかにする。

本研究の対象地域は札幌市全域である。ただし、札幌市は南区の一部である市の南西部が人口密度の希薄な山岳地帯となっており、居住人口の多くは図1に示した範囲内に集中する¹⁾。そのため、本研究では人口が集中する図1の範囲における人口分布の変化を明らかにしている。分析に用いる単位地区は札幌市によって設定されている統計区お

よび準統計区とする²⁾。用いたデータは、札幌市発行の『札幌市の地域構造』(1977, 1982, 1987, 1994, 1999, 2005年版)であり、この資料は札幌市が国勢調査の結果を基に統計区ごとの人口を整理したものである。なお、2005年の国勢調査のデータについては、札幌市が独自に集計した要計表の結果を採用している。札幌市の統計区による人口データは、1995年より準統計区を含めたデータとして整備されている。ここでは、より詳細な分布傾向を明らかにするため、1995年以降のデータに関しては準統計区も単位地区として採用する。そのため、年次により採用する単位地区数が異なる。

札幌市における統計区および準統計区ごとの人

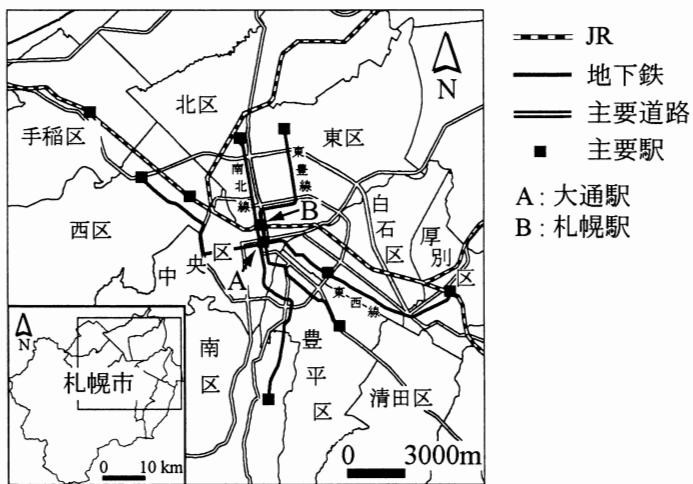


図1 地域概観

*北海道大学文学研究科大学院生

*Graduate Student, Graduate School of Letters, Hokkaido University

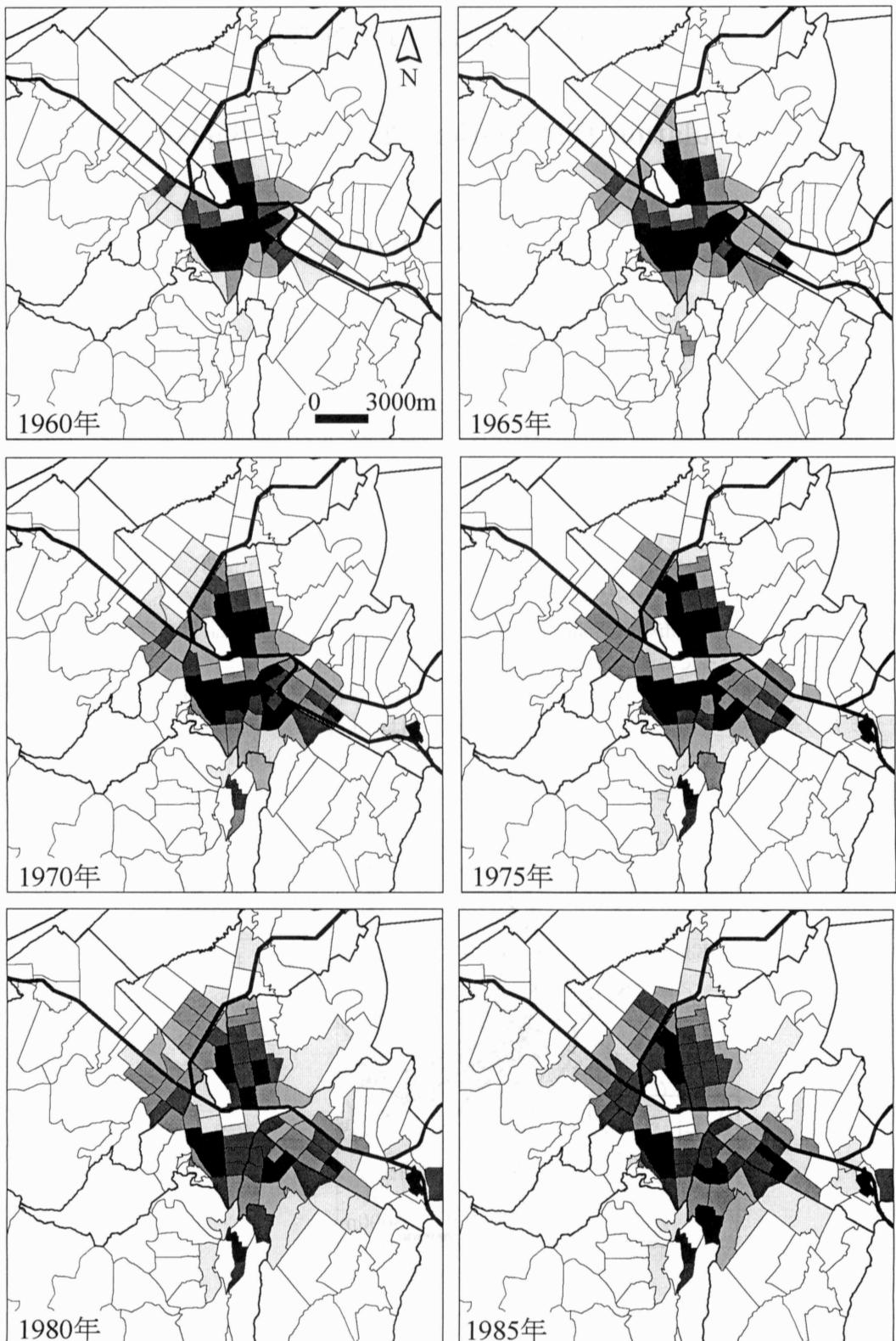
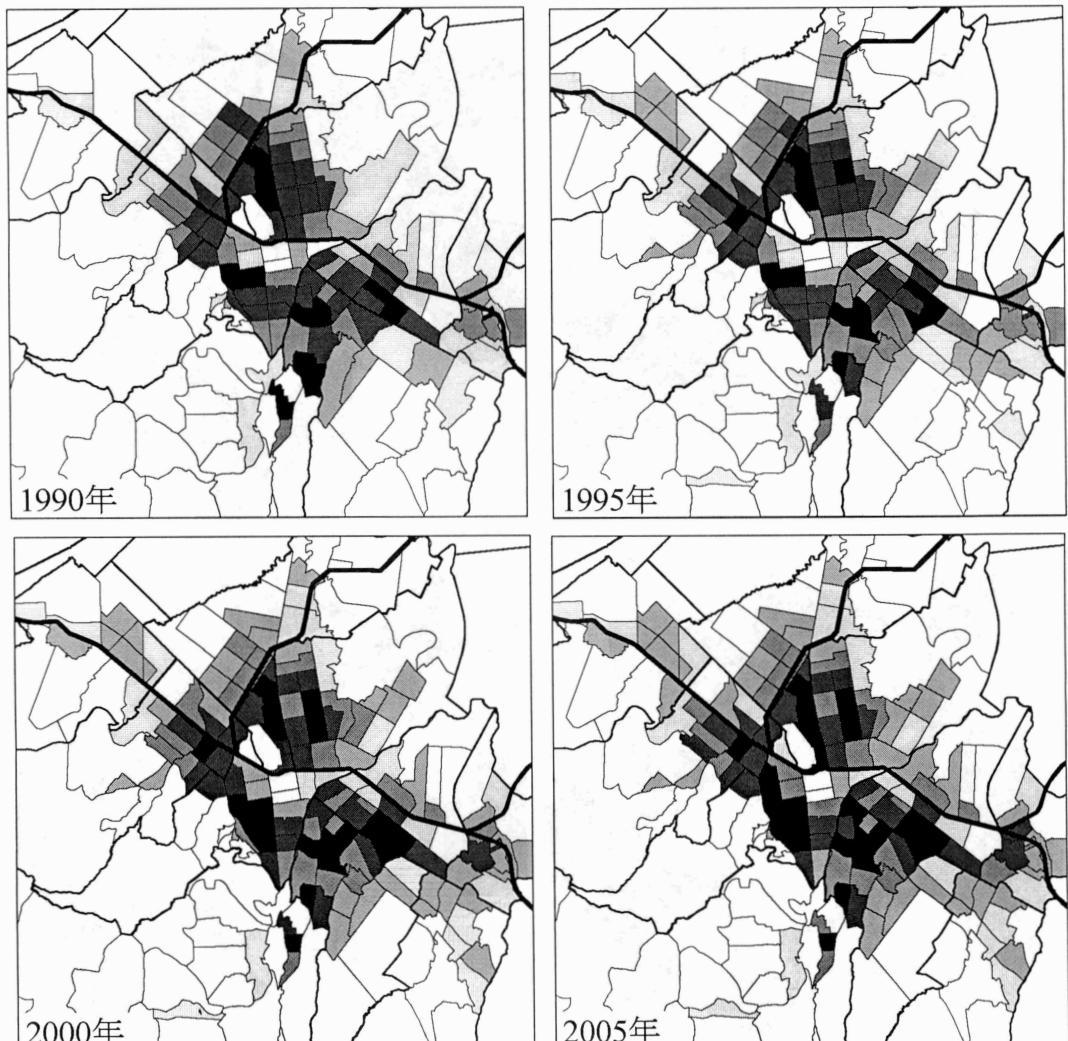


図2 札幌市統計区別人口密度(1)



— JR, 国鉄

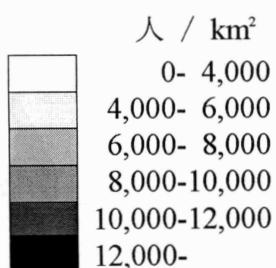
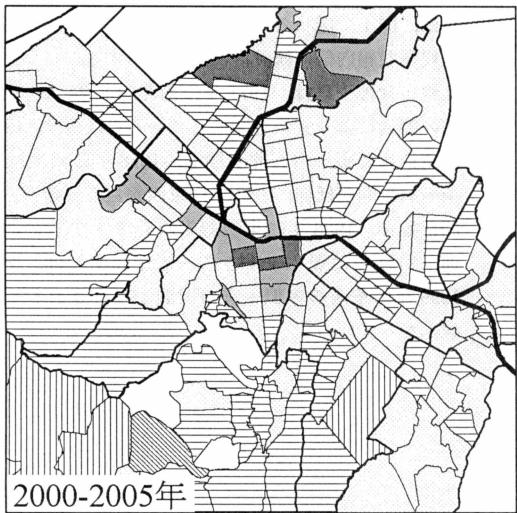
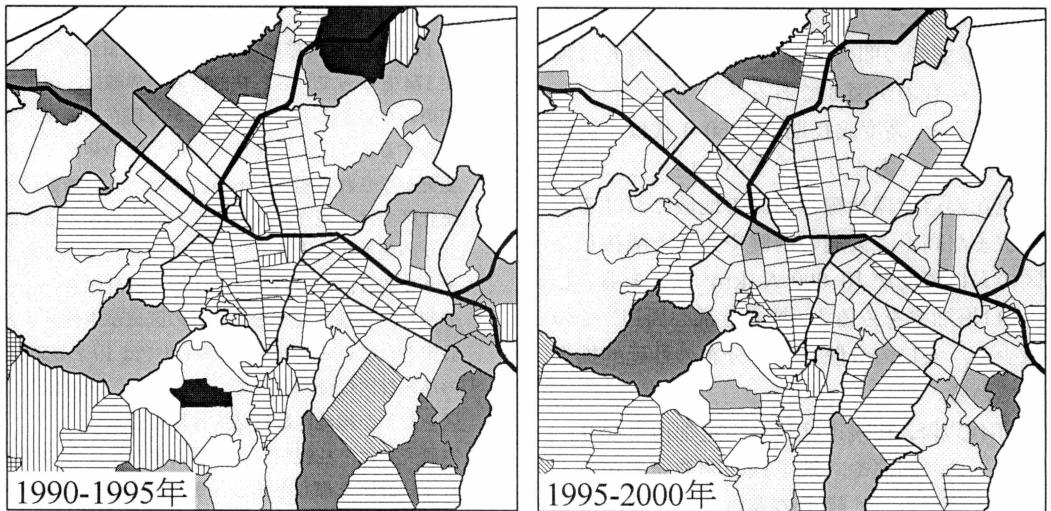


図2 札幌市統計区別人口密度(2)



図3 札幌市統計区分年平均人口増減率(1)



JR, 国鉄

(%)

	-10.00 -
	-10.00 - -5.00
	-5.00 - -2.50
	-2.50 - 0.00
	増減なし (居住人口なしの統計区も含む)
	0.00 - 2.50
	2.50 - 5.00
	5.00 - 10.00
	10.00 -

図3 札幌市統計区分別年平均人口増減率(2)

人口密度を明らかにしたものが図2であり、1960年から2005年までの間の5年ごとの年平均人口増加率を示したもののが図3である。

これによると、高度成長期の1960年代は市街地の外延的拡大が、あまり進んでいない。この時点では、現在の道道環状線の内側の地域における人口密度がまだ高く、大通の南側や大通と隣接した統計区の人口密度が10,000人/km²以上ある。しかし、人口増加率をみると、都心と都心周辺³⁾での人口減少と、人口の分散および分布の外延的拡大が生じている。

1970年代以降、札幌市は政令指定都市となり、オリンピックの開催や、地下鉄の開業などがあった。この時期から、札幌市の人口分布は急激に外延的に拡大し、1970年代は地下鉄南北線の沿線において、1980年代からは東西線の沿線において、地下鉄の開通と延伸⁴⁾に伴う人口増加がみられる。

さらに1990年代には、手稲区や清田区においても、6,000人/km²の統計区が散見されるようになる。単位地区別の人口増加率をみると、札幌市における人口のドーナツ化は、徐々にペースは落ちるもののは1990年代中頃まで続いている。

その後、1995～2000年には、人口分布の外延的拡大傾向が鈍り、逆に都心周辺において人口が減少から増加へと転じる統計区が現れ始める。この傾向は2000年以降更に強まり、2000～2005年の5年間には、札幌市の都心および都心周辺地域の人口増加率が、多くの統計区で増加に転じており、その中には年間5.00%以上増加する統計区も存在する。さらに、2005年には都心周辺の統計区において人口密度が1960～70年代の水準まで回復している統計区が散見され、人口の都心回帰現象が生じている。これは、日本の他の大都市においても報告されている現象であるが、札幌市においても近年、人口が都心への再集中をはじめていることが明らかとなった。

注

- 1) 図1に示したJR、地下鉄および主要道路は2005年時点のものである。
- 2) 統計区は、1972年4月の区制施行に合わせて札幌市がセンサス・トラクト方式により設定したものである。

設定当初、統計区の数は、全市で172であったが、1989年11月の分区実施の際、新たに2統計区が増えて、現在174となっている。統計区の境界線は、原則として変更のこととなっているが、現在の地域の実情に適合するよう、その都度必要最小限の範囲で境界線の変更がなされる場合もある。また、人口増加の著しい統計区では、現在、人口規模が設定当初の1統計区あたりの基準値を大きく上回っている。そのため、このような統計区については、1つの統計区をいくつかに分割し、分割されたそれぞれの区域が準統計区として設定されている。2000年の時点では19の統計区が51の準統計区に分割されている。なお、統計区と準統計区をたした総地区数は206地区となる。

- 3) 本研究では、札幌駅、大通駅およびすすきの駅が含まれる統計区を都心とする。また、都心部より2～3kmほど外縁にあたる統計区を都心周辺と位置づける。これは、図1で環状の主要道路として示されている道道札幌環状線内部の統計区にはほぼ相当する。
- 4) 札幌市営地下鉄は、1971年に南北線北24条～真駒内間の開通により営業を開始している。以後は、1976年に東西線琴似～白石間が開通、1978年に南北線北24条～麻生間が延伸、1982年に東西線白石～新さっぽろ間が延伸、1988年に東豊線栄町豊水すすきの間が開通、1994年に豊水すすきの～福住間が延伸、そして1999年に東西線琴似～宮の沢間が延伸され現在の路線となっている。